

<実践報告>

中学校社会科における「パフォーマンス課題」を導入した授業の試み
— 単元「運転免許証自主返納から考える現代社会」の開発と実践 —

百田美希 信州大学教育学部附属長野中学校
 武井正樹 信州大学教育学部附属長野中学校
 矢澤拓真 信州大学教育学部附属長野中学校
 篠崎正典 信州大学学術研究院教育学系

The Approaches of Introducing “Performance Tasks”
 into Junior High School Social Studies Lessons:
 Design and Practice of the Unit “Thinking about Modern Society
 from the Voluntary Return of Elderly Driver’s License”

MOMOTA Miki: Nagano Junior High School Attached to Faculty of Education,
 Shinshu University

TAKEI Masaki: Nagano Junior High School Attached to Faculty of Education,
 Shinshu University

YAZAWA Takuma: Nagano Junior High School Attached to Faculty of Education,
 Shinshu University

SHINOZAKI Masanori: Institute of Education, Shinshu University

研究の目的	生徒の「社会的事象の意味や意義を多面的・多角的に考察する力」を高める上で、「パフォーマンス課題」が果たす意義と課題を検討すること。
キーワード	中学校社会科 「社会的事象の意味や意義を多面的・多角的に考察する力」 パフォーマンス課題
実践の目的	中学校社会科公民的分野の授業改善
実践者名	第一著者と同じ
対象者	信州大学教育学部附属長野中学校 3 年生（40 名）
実践期間	2019 年 12 月
実践研究の方法と経過	①単元の開発, ②単元の実施, ③②における生徒の「社会的事象の意味や意義を多面的・多角的に考察する力」の高まりの検証。
実践から得られた知見・提言	高齢者が、運転免許を自主返納して安心して生活できるまちにするための改善案を市に提言するレポート作成活動、各改善案を検討する活動を位置付けたことは、社会的事象の意味や意義などを多面的・多角的に考察する力を高めるため上で有効である。

1. はじめに

新学習指導要領（『中学校学習指導要領解説 社会編』，以下，『新要領』）では，見方・考え方を働かせて課題解決を行うことで，生徒の資質・能力の育成を目指している（文部科学省 2018）．同時に，資質・能力の育成のための学習評価の改善も重視されている．こうした中で，2021 年度から『新要領』が全面実施となるが，どのように対応したら良いか．

本実践の対象クラスでは，3 年間（2017～2019 年度），社会の一員としての基礎を養う生徒の姿を目指して学習を積み重ねてきた．この姿の具現化のために必要な力として強調したのが，「社会的事象の意味や意義などを多面的・多角的に考察する力」である．これは，現行の学習指導要領（以下，『旧要領』）で重視する力（文部科学省 2008）であり，これをより精緻化したものが見方・考え方である．したがって，「社会的事象の意味や意義などを多面的・多角的に考察する力」を高める方法を検討することは，『新要領』に対応するための方法を模索する上での重要な基礎的な研究として位置付けられる．

そこで注目したのが「パフォーマンス課題」である．「パフォーマンス課題」とは，「実際に生活や社会で直面するような文脈に即して問題場を設定して，そこでの思考過程を評価」するパフォーマンス評価において設定する問題場面である（西岡ほか 2017）．すなわち，「さまざまな知識やスキルを総合して使いこなすことを求める課題」（豊畠・柴田 2018）である．「パフォーマンス課題」は『新要領』の実践を行う上で期待され，研究が蓄積されている（宮田・奥村 2017 など）．本実践もその文脈に位置づく一つの試みである．

以上を踏まえ，本実践では，「パフォーマンス課題」を導入した授業を構想し，生徒の「社会的事象の意味や意義を多面的・多角的に考察する力」の高まりを検証することを目的とする．手続きは次の通りである．まず，単元開発の意図と教材化について考察する．次に，「パフォーマンス課題」を導入した単元を開発する．その上で，開発した単元を実践し，生徒の「社会的事象の意味や意義を多面的・多角的に考察する力」の高まりを検証する．

2. 単元開発の意図と教材化

2.1 3 年間を通した「社会的事象の意味や意義を多面的・多角的に考察する力」の育成

本実践では，地理，歴史，公民の各分野の特質を尊重しつつ，分野を越えて社会科を学ぶ意義を生徒と共に見出すことを重視する（図 1）．そこで，表 1 に示す社会科における「本質的な問い」を設け，それを解決するために「分野（公民）の問い」「本単元の問い」を設ける．「本質的な問い」とは，「学問の中核に位置する問いであると同時に，生活との関連

表 1 社会科における「本質的な問い」

社会科全体を貫く包括的な「本質的な問い」	「私たちが幸福に暮らせる社会とはどのような社会なのだろうか」
分野（公民）の問い	「私が願う長野市や日本の姿に近付いていくために，必要な社会の仕組みとはどのようなものか．また，よりよい解決や合意形成に必要なことは何か」
本単元の問い	「高齢者が運転免許証を安心して返納し，生活していけるまちにするためにはどうしたらよいのか」

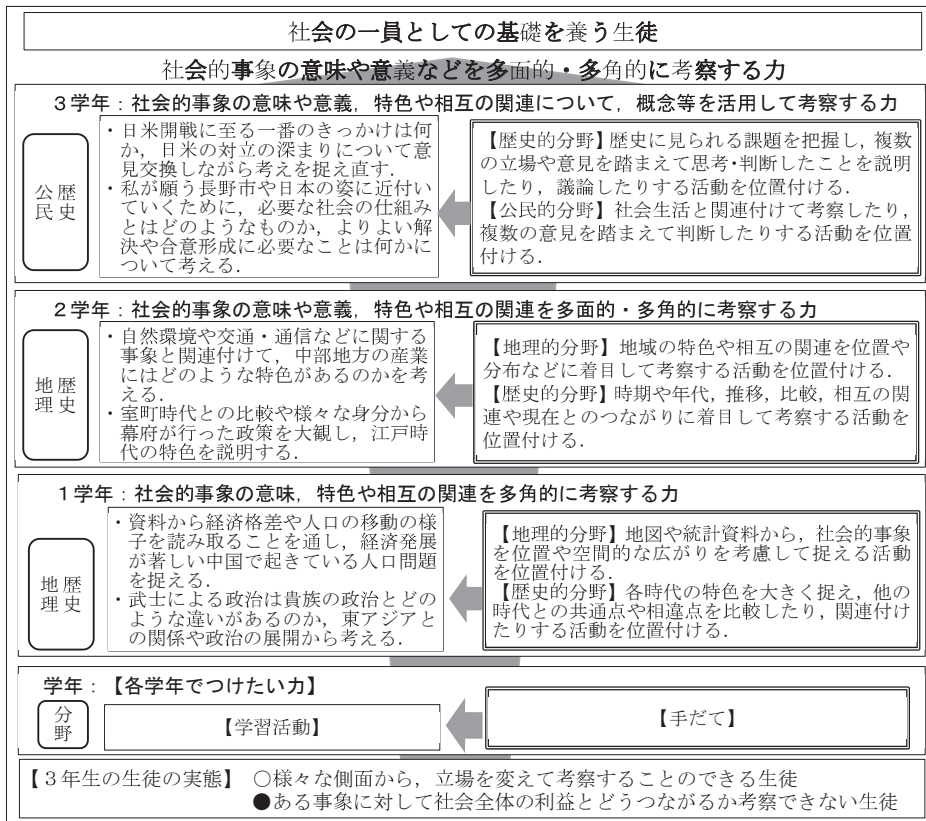


図1 3年間にわたる「社会的事象の意味や意義を多面的・多角的に考察する力」の育成

から学ぶ意義が見えてくるような問い」(西岡ほか 2019)である。これにより、学びが発展的かつ系統的なものとなっていくと考える。同時に、そのような学習過程を通して、「社会の一員としての基礎を養う生徒」の姿に迫ることができると考える。

2.2 「長野市の高齢化問題」の教材化

①教材化の意図

本単元の背景には、公民的分野の導入単元で参議院議員選挙(2019年7月)を扱い、生徒が長野市や日本に願う姿を持っていたことがある。授業では、各候補者の主張を比較した上で、自身が抱く今後の日本への願いを基に模擬投票を行った。その中で、以下の「私たちが願う長野市の姿」をまとめ、「9月に行われる長野市議会選挙では、わたしたちが長野市に願うことをもとに候補者の主張を聞いてみたい」と述べる生徒の姿があった。

○公共交通機関や道路の整備がされ、暮らしやすい長野市 ○自然を大切にしながら、観光により多くの人が訪れる長野市 ○経済を活性化させ、活発な地域活動が行われる長野市 ○社会保障・子育て支援など、市民の暮らしに重点を置いた長野市 ○過疎地域を減らし、多くの人が暮らす長野市 ○情報格差のない長野市

本単元では、増加する高齢ドライバーに運転免許証の自主返納を勧める動きから、現代社会の問題を考えていく。高齢者が自主返納しにくい背景には、過疎化、社会保障制度の

問題、地方経済の停滞など、国や地方公共団体の政治に関わる問題が横たわっている。長野県は山間地が多く、過疎化や高齢化が進む県であり、運転免許証を自主返納する高齢者の数は増えているが、75歳以上の自主返納率は、全国で43位の4.1%に留まる。多くの生徒が住む長野市にも過疎化や高齢化が進む山間地域があり、買い物や通院の不便さから自主返納をためらう高齢者がいる。そのため、今後、長野市でも高齢ドライバーに対する政策の改善が必要になってくる。こうした長野市の運転免許証返納問題を扱うことで現代社会の問題に自らの接点を感じながら向き合い、考察していくことにつながると考えた。

②教材化の視点

上述の教材化の意図を具体化するために、本実践では、次の3つの視点を設ける。

一つ目は、長野市の高齢者が運転免許証を返納しづらい現状を捉え、安心して生活できるまちにするための改善案を考える活動を位置付ける（第1・2時）ことである。第1時で、自身の祖父母の様子、報道の情報、長野県における75歳以上の自主返納率が全国43位であることなどを踏まえ、山間地が広がる長野市でも自主返納しにくい状況があることを捉える。その後、グループごとに長野市の運転免許証の年齢別保有率や山間地域の高齢化率の推移、交通機関の路線や料金などの高齢者を取り巻く実態を調べる。第2時では、グループで調べたことを発表し、過疎化や高齢化の進行、病院や買い物場所がないにも関わらず交通機関の整備が十分であり、車が必要不可欠であることを把握する。その上で、高齢者の事故の減少を願い自主返納を進める必要性を考えるが、知識や情報の乏しさから、改善案を見出せない生徒がいることが予想されるため、教師は、高齢者の運転免許証自主返納問題を授業で扱い、改善案を考えることを告げて「パフォーマンス課題」を設定する。

長野県は、75歳以上の高齢者の運転免許証の自主返納率が全国で43位です。あなたの住む長野市も、山間地では過疎化、高齢化が進んでおり、運転免許証の自主返納をしにくい状況であると考えられます。あなたが住んでいる長野市に対し、市民の一人として過疎化、高齢化の進む山間地域に住む75歳以上の高齢者が運転免許証を返納し、安心して生活していけるまちにするための提言をしましょう。

その際、「パフォーマンス課題」の解決が思い（「高齢者が自主返納した後、安心して生活できる長野市に」）の実現につながることを実感させ、主体的に取り組むよう配慮する。予想が似ている生徒同士でグループを組み、資料収集を進めるよう促して第2時を終える。

二つ目は、パフォーマンス課題の解決に向けて、収集した資料を基に具体的な改善案を考える（第3・4時）ことである。第3時、生徒は、収集した資料をグループで持ち寄り、気付いたことを確認し合う。第4時、生徒は、長野市や他の地方公共団体の対策を調べたことを踏まえ、具体的な改善案をグループごとに作成する。これにより、生徒は、長野市と他県や他市の地方公共団体との比較や関連付けにより、改善案を考えることができる。

三つ目は、「私たちが願う長野市の姿」に着目し、各改善案の「よい点」「問題点」を検する活動（本時）を位置付けることである。第5時、各グループの改善案を全体で発表し合い、高齢者が安心して自主返納できる改善案にするため、各改善案の「よい点」「問題点」

を検討する。生徒は、交通網の整備やサービス事業の普及という改善案自体の効果や実現度の対象の比較、高齢者、地域に住む人々、行政、自分などの立場から検討する。その上で、自分たちの案のよさや課題を再確認し、長野市に提言する自分の考えを再構築する。これにより、生徒は、少子高齢化や過疎化など現代社会の課題を多面的に捉え、高齢者、多くの市民、行政の立場から改善案を多角的に考察する力を高めることができると考える。

3. 「パフォーマンス課題」を導入した単元の構想

A. 単元名・学年（時間） 「運転免許証自主返納から考える現代社会」・3年（7時間扱い）

B. 単元の目標

- ①少子高齢化の進行とともに生じている課題や、それにまつわる事象について正しく理解することができる。（知識・技能）
- ②少子高齢化や運転免許証の自主返納に関する情報を効果的に調べ、まとめることができる。（知識・技能）
- ③高齢者が運転免許証を自主返納しにくい背景を多面的・多角的に捉え、その改善案を考察することができる。（思考・判断・表現）
- ④様々な立場や考え方があることを踏まえて、よりよい改善案を公正に判断することができる。（思考・判断・表現）
- ⑤現代社会の特色を踏まえ、これからの社会の在り方を構想している。（主体的に学習に取り組む態度）

C. 単元の「パフォーマンス課題」とルーブリック

表2 「パフォーマンス課題」とルーブリック

課題：「長野市を高齢者が運転免許証を返納し、安心して生活していけるまちにする」ための提言レポート	
A 良い	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢ドライバーの運転免許証の自主返納の問題から、「何が問題なのか、その問題を生じさせている原因は何か」を社会のしくみと関連付けて適切に説明している。 ・「どうすれば問題を解決できるのか」の提案がより多くの市民にとって有効な策であり、理にかなっている。 ・その提案に関する反論についても推測して、根拠を基に反論している。 ・適切な資料を選択し効果的に活用しており、読みやすい構成でまとめている。
B 合格	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢ドライバーの運転免許証の自主返納の問題から、「何が問題なのか、その問題を生じさせている原因は何か」を社会のしくみと関連付けて説明している。 ・「どうすればその問題を解決できるのか」の提案がされている。 ・その提案に関する反論についても推測して、事実を基に自分の考えを説明している。 ・資料を活用して読みやすい構成でまとめている。
C もう 一步	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢ドライバーの運転免許証の自主返納の問題から、「何が問題なのか、その問題を生じさせている原因は何か」を説明しているが、社会のしくみとの関連付けがあやふやであるため、事実の紹介になっている。 ・「どうすればその問題を解決できるのか」の提案がされているが、理解が不正確である。 ・その提案に関する反論について推測しているが、反論がないか、根拠に説得力がない。 ・資料を使っているが、内容と関連付けて活用することができていない。

D. 単元展開

表3 単元「運転免許証自主返納から考える現代社会」の展開（全7時間）

段階	学習活動	◇教師の指導・援助 ◆予想される生徒の意識	○評価規準	欄
1 導	高齢ドライバーによる免許返納問題	◇高齢ドライバーによる免許返納問題について問う。 ◆長野県は全国の中でも自主返納率が低いらしい、長野市も、山	⑤運転免許証自主返納の問題に改善案を見い	2

入	<p>許返納問題の話題から、パフォーマンス課題を設定し、単元の見直しをもつ。</p>	<p>間地では車のほかに移動手段がないので返納が難しいと思う。 ◇長野市の実態を調べ、高齢者を取り巻く実態を捉える。 ◆長野市の山間地は過疎化、高齢化が進み、車がない高齢者が買い物や病院に行くには便数が少ないバスや高額なタクシーを使うしかない。返納したいのができない社会が問題だと思う。 ◇捉えた現状をもとに改善案を長野市に提言することを提案し、パフォーマンス課題を設定する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>パフォーマンス課題 長野市は、75歳以上の高齢者の運転免許証の自主返納率が全国で43位です。あなたの住む長野市も、山間地では過疎化、高齢化が進んでおり、運転免許証の自主返納をしにくい状況であると考えられます。あなたが住んでいる長野市に対し、市民の一人として過疎化、高齢化の進む山間地域に住む75歳以上の高齢者が運転免許証を返納し、安心して生活していけるまちにするための提言をしましょう。</p> </div> <p>◆病院や買い物のためには、日常的に使用しやすい交通手段が必要不可欠だから、交通網の整備が必要ではないか。</p>	<p>出すべく、追究しようとしている。【主体的に学習に取り組む態度】 ①長野市で少子高齢化の進行とともに生じている課題について理解している。【知識・技能】</p>	
追	<p>2 収集した資料を基に、情報を選択し、改善案を作成する。</p>	<p>◇前時に挙げた予想を基にグループを作り、各が集めた資料を持ち寄り、長野市や他県の取り組みを調べる。 ◆長野市はバスの運賃割引サービスがあるが、信州新町では割引サービスを使っても1,000円以上かかるし本数も少ない。小型バスがある地方公共団体に参考になるものはないだろうか。 ◇捉えた長野市の実態を基に、改善案をグループで考える。 ◆バスの料金を安くするために、小型で環境に優しいバスを採用したらよいのではないか。小型にすれば従来よりも道路が細い山間地に路線を広げられそう。さらに、バスの回数券やタクシーチケットを継続的に交付したらよいのではないか。</p>	<p>②収集した諸資料を基に、長野市と様々な都道府県を比較し、情報をまとめている。【知識・技能】 ③高齢者が自主返納しにくい背景を多面的・多角的に捉え、その解決案を考察している。【思考・判断・表現】</p>	2
究	<p>3 各グループの改善案の発表を聞き、検討する。</p>	<p>◇前時にまとめた改善案について発表し合う。 ◆65歳以上で運転免許証を自主返納した人にはどこまででも利用できるパスポートを交付するという案を考えたグループがあった。早期返納で高齢者の金銭的な負担も減るからよいと思う。 ◆さらによい改善案にするためにはどんな工夫ができるだろうか。他のグループからの意見も聞いてみたい。 ◇「私たちが願う長野市の姿」を着目の対象とし、各改善案のよい点、問題点を検討する活動を位置付ける。 ◆小型バスという公共交通機関が整備されれば、高齢者だけでなく多くの市民が暮らしやすくなる。運賃補助は、高齢者だけでなく子育て世代も含めると社会保障の充実につながるだろう。 ◆バスなどの移動手段の充実が「暮らしやすさ」につながるわけではない。高齢者が地域で安心して生活できるように遠隔医療での健康管理、買い物サービスのようなサポートも必要だ。</p>	<p>①各グループの改善案の発表を聞き、自らの改善案を再構築しようとしている。【主体的に学習に取り組む態度】 ④長野市に対して提言する自分の考えを再構築している【思考・判断・表現】</p>	2 本時は第2時
まとめ		<p>◇長野市への提言をまとめる。 ◆多くの高齢者は、買い物や通院の移動手段に不安を感じ返納ができません。そこで私は、バス路線の少ない過疎地域の現在のバス路線の見直しと、遠隔医療や買い物サービスを取り入れることを提案します。小型バスを利用すればコストカットでき、山間地でも運行しやすくなります。また、65歳以上で運転免許証を返納した人や子育て中の人には、一律運賃で利用できるパスポートを発行すれば、より多くの市民にとって利用しやすくなります。さらに、市街地に行かなくても地域の中で安心して暮らせるサポートの充実が必要だと考えます。 ◇単元の振り返りをする。 ◆交通手段が充実すれば自主返納しやすいただろうと考えていたが、みんなの意見を聞き、高齢者だけでなく多くの市民にとっても役に立つ案や、市街地に行かなくても地域の中で安心して生活できるようにする方法を考える必要があると思った。</p>	<p>④改善策を多面的・多角的に考察し、公正に判断している。【思考・判断・表現】</p>	1

E. 本時の展開

①主眼：どのような改善案を実行すれば、高齢者が安心して自主返納できる社会になるかを考える場面で、「私たちが願う長野市の姿」に着目して各グループの改善案のよさや問題点を検討することで、長野市に対して提言する自分の考えを再構築できる。

②本時の評価規準：

A評価：友の意見を聞き、より多くの高齢者が安心して暮らせる改善策を「私たちが願う長野市の姿」を取り入れて多面的・多角的に考察している。

B評価：友の意見を聞き、「私たちが願う長野市の姿」に近付くことができそうな改善策を多面的・多角的に考察している。

③展開

表4 単元「運転免許証自主返納から考える現代社会」(第6時)の展開

段階	学習活動	予想される生徒の反応	◇教師の指導・援助	時間	備考
問題把握	1 本時の学習の見通しをもつ。	学習問題：どのような改善案を実行すれば、高齢者が安心して自主返納できる社会になるだろうか。 ア 小型バスを運行し、バス停を増やす。自主返納をした高齢者向けのパスポートを交付し、割引サービスを行うにしようか、これだけで提言できるものになっているのだろうか。それぞれの案を「私たちの長野市に願う姿」と照らして考えたい。	◇各グループから出された案を確認する。その後、アのような発言から、「私たちの願う長野市の姿」に着目して改善案を検討していくことを確認し、学習課題を据える。	4分	学習カード
	2 それぞれの改善案について、グループで検討する。	イ 小型バスなら、狭い道でも走りやすいので、これまでよりも路線の範囲を広げることができる。移動が大変な高齢者にとって、バス停が増えることはとてもよい。地域に住む人にとってもよいことだと思う。 ウ 1 班は、財政面を気にしている。公共交通機関が整備されれば便利だが、利用者が少ない路線の維持にはお金がかかる。 エ 2 班は、遠隔医療や買い物サービスの充実を掲げている。交通網の整備と共に、市街地に行かなくても安心して生活ができるサポートにも目を向ける必要がある。そうすることで、郊外でも安心して住むことができる長野市になれそうだ。	◇前時で発表された改善案のよい点、問題点を考え、学習カードに記入するように促す。 ◇記入が進まない生徒には、発表で印象に残った考え、誰にとっても、どんな点がよい点、問題点を考えるように促す。 ◇改善案が「私たちの願う長野市の姿」のどこに関連をもっているのか問う。 ◇問題点を挙げているグループには、それを解消するためのさらなる改善案を考えてみるよう助言する。	16分	
	3 全体で検討する。	オ Aさんは、子育て世代にもパスポートを検討した。移動手段が増えれば、山間地に住む若い世代も増えるかもしれない。 カ Bさんは、バス路線を整備し、地場産業の見直しや観光化を進めれば、地域が活性化し高齢者が暮らしやすくなると提案していたが、観光客が増えてにぎわうことでくらしが変化し、安心して暮らせないと感じる高齢者もいるのではないか。 キ 病院や買い物に行きやすくするためにバス路線の整備を考えているが、コストがかかるし、バスでの移動が大変という高齢者もいる。市街地に出なくても、地域の中でのくらしやすさを重視した遠隔医療を取	◇全体検討の際には、それぞれの案の「よい点」「問題点」を比較、関連付けやすいように整理して板書していく。 ◇「私たちの願う長野市の姿」のよさや問題点を検討する指針となると共に、「私たちの願う長野市の姿」自体を立ち返って考える場が生まれることも予想される。その際は、立ち返って全体で考える。 ◇全体検討をしていく中で、気付いたことや、さらなる改善案を見いだした生徒は、全体に発	20分	

／ ま と め	4 本時の学習を振り返り、分かったことをまとめる。	り入れる案がよいと思う。 ク バスなどの移動手段を充実させることだけが「暮らしやすさ」につながるわけではない。高齢者が地域の中で安心して生活できるようにするためには、遠隔医療や買い物サービスなどのサポートが必要だ。 ケ 考えを再構成して提言レポートにまとめよう。	表するように促す。 ◇全体検討を踏まえ、自分の判断や理由の練り直しをする時間を取る。 ◇自分の考えを再構築した生徒に発言を促すと共に、ケのように提言に触れた生徒に発言を促し、次時への意識をもつ。	10 分	
------------------	---------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------	--

4. 生徒の「社会的事象の意味や意義を多面的・多角的に考察する力」の高まり

4.1 本時における高まり

本時（表 4）で「社会的事象の意味や意義を多面的・多角的に考察する力」の高まりが見られたのは、グループで考えた改善案を、他のグループからの意見や各グループの改善案を知り、「私たちが願う長野市の姿」に近づけていくために意見交換をした場面である。

自動車がなくとも過ごしやすい環境を作り出すために、移動販売車の必要性を考えた Y 生のグループには、「衛生面から考えて、生鮮食品を一日中持ち歩き、スーパーで売るのはどうなのか。冷凍する費用や燃料費を支援してもらえるのだろうか。また、車は誰が運転をするのか」という問題が寄せられた。この問題について、次のように意見交換をした。

Y 生 11:移動販売車なので、確かに衛生面では心配なところがありますね。
H 生 12:夏などは、生鮮食品が傷んでしまわないか心配ですが、保冷機能のよりよい車を使えばどうでしょうか。
Y 生 13:人件費がかからないので、よい案だと思いますが、それではやはり設備投資にお金がかかってしまいます。
S 生 14:移動販売車で売れ残ってしまった場合には、スーパーに届けるタイミングを早めてみたらどうでしょうか。
U 生 15:それも 1 つの案だと思いますが、夕方に買い物に行きたい人にとっては、ある程度の時間まで移動販売車がいることに意味があるのだと思います。
Y 生 16:高齢者にも安全でおいしい食品を提供できる環境を整えることが必要ですね。
H 生 17:そうすると、働く時間の問題もあり、ここに書かれているように誰が運転をするのか、という問題にもつながっていきます。
Y 生 18:お金になるのならば、やりたいという人は出てくると思います。
H 生 19:それはわたしたちの案にも言えることです。例えば、「だれが移動販売車の運転をするのか」という問題点が挙げられていましたが、これも利益が出て、報酬がきちんと支払われればやりたいという人は出てくると思います。
S 生 20:タクシーのグループの案で、運転手を 60 歳以上の高齢者にお願いするという案が出ていました。私たちの案でもすでに退職したけれどまだ元気だという人たちを募集するのはどうでしょうか。
Y 生 21:それは働きがいにもなりますし、そういう人たちが地域の見守りを兼ねて移動スーパーで回っていけば、よい点として挙げてもらった「地域コミュニティのことを考えている」ということも活かせると思います。
U 生 22:報酬の件が難しいですね。少ない資金の中で、さらに人件費がかかってくるとなると、長野市からの支援だけでは絶対に足りません。
H 生 23:もっと長野市と協力して、人材集めや資金集めをしなければなりませんね。
Y 生 24:前回、ICT を視点にしたグループが「クラウドファンディング」で資金を集めると言っていました。私たちのグループも地域の見守りをしながら買い物の支援をするということで、資金を集めたらどうでしょうか。

前時まで高齢者の負担を減らすことを追究してきた Y 生は、他グループによる保冷機能の改善などの設備投資による鮮度の問題解決に関する意見を受け、コストの問題を考えた。その後、Y 生は、売れ残り商品を早めにスーパーに届けて鮮度の問題を解決する方法や長い時間の移動販売車の利用という友の考えを聞き、高齢者にも安全でおいしい食品を提供すべきという考えをもった。これは、Y 生が「パフォーマンス課題」の「安心して生活していけるまち」に着目して、安全な食品の提供という新たな見方が加わったことを意味す

る。さらに、「誰が移動販売車を運転するのか」の意見交換を続けた Y 生は、「タクシーの利用」に注目した他グループの考えを聞き、仕事を引退し、安全な運転ができる高齢者を雇う案を考えた。しかし、人件費がかかりすぎるという友の考えを聞き、「ICT の利用」に注目したグループの考えから資金に対する改善案を提案できた。このような Y 生の姿は、行政だけではなく、市民の立場という新たな見方から、自身のグループの改善案を見直せたからと考えられる。ゆえに、本時のまとめの学習カードには、次の記述が見られた。

まずは、車がなくても不便なく生活できるということを目指す。そのためにも、様々な視点から今の現状を改善させなくてはならない。「お金、人手、時間」が課題を解決するキーワードになってくと思う。
 お金は、もっと市と協力をしていく必要がある。市民からの寄付も考えられる。人手は、現在フリーな人を雇う。時間は、効率的なことをもっと考える。しかし、これらの課題の一つずつ改善させようとすると、他の部分に課題が生まれてくる。一つの課題を改善させると、他の課題に直面するという循環が生まれてくる。これをどうしていけばよいのだろうか。

ここから Y 生が、「パフォーマンス課題」の高齢者が車を持たなくても「安心して生活していけるまち」を追究する中で、移動販売車の導入によるコスト問題だけでなく、食品の安全、人員の確保、人件費という視点にも気付いた。さらに、他グループの考えを取り入れ、行政だけでなく、市民の立場からも課題解決の糸口が見出せた。こうした姿が、本時を通じた「社会的事象の意味や意義を多面的・多角的に考察する力」の高まりと言える。

4.2 単元を通じた高まり

単元末、Y 生は「パフォーマンス課題」の提言レポートを図 2 のようにまとめた。

[提言レポート]

今長野県は75歳以上の高齢者の運転免許証の自主返納率が全国で43位となっていて、この状況を解決するために、「長野市の過疎化・高齢化」について調べて考えました。

★ (6/6) なぜ自主返納を高齢者の方に行えないのか。

- ・近くに商店がない → 買い物に行くには車が必要。
- ・公共交通機関が発達していない → 病院へ行くにも、買い物に行くにも不便。車が必要になってくる。
- 山間部が多く、そもそも人が少ない。

★ (6/2) この状況を少しでもよくしたいので解決できるか。

＜移動販売車を使った、移動販売をしよう！＞

- ・週3回程度過疎地域で、移動販売をしよう。
- ・スライド提携して、人手を確保。
- ・残った商品は提携先のスライドに引き取り販売可能。
- ・お金の面では長野市に支援してもらおう。
- ・確実に欲しい商品は事前に連絡。

★ (6/4) 課題となってきた点に対してどういった反論がでるのか。

コストに関しては 人手に関しては 会場場所に関しては

コストに関しては 高齢者の乗降が難しい。移動販売車は狭い。山間部は道路が狭い。コストがかかる。スライド提携先は少ない。会場場所は難しい。課題となる。

人手に関しては 高齢者の免許取得が難しい。移動販売車は狭い。山間部は道路が狭い。コストがかかる。スライド提携先は少ない。会場場所は難しい。課題となる。

会場場所に関しては 高齢者の免許取得が難しい。移動販売車は狭い。山間部は道路が狭い。コストがかかる。スライド提携先は少ない。会場場所は難しい。課題となる。

★ (6/5) 実現は難しいとしても、何かのきっかけで長野市で実現したいと思いませんか。

実現は難しいとしても、何かのきっかけで長野市で実現したいと思いませんか。

【この単元を通してわかったこと・課題】

まずは、この問題を解決するには、何が必要かを考えることが大切だ。例えば、高齢者の免許取得が難しい。移動販売車は狭い。山間部は道路が狭い。コストがかかる。スライド提携先は少ない。会場場所は難しい。課題となる。

図 2 Y 生の提言レポート

Y生は単元を通して、高齢者が市街地に出なくても買い物ができることに着目し、移動販売で安心して生活できるようにしたいと願い、追究を重ねてきた。その中で長野市の過疎地域の現状を知り、移動販売車の設置によって生じる問題に対する対策を整理し、改善案を考えることができた。同時に、高齢者の暮らしに目を向け、移動販売車は単なる買い物の手段ではなく、過疎地域で一人暮らしをする高齢者を見守ることにつながると考えた。さらに、移動販売車の導入という行政の支援に加え、安全性、利便性、価格などの問題点から、多くの市民の理解によって、資金を集めるクラウドファンディングをとることで、高齢者だけでなく、「市民や地域によって支えられ、地域のために運用される移動販売車」という改善案を考えることができた。これらの追究を通してY生は、長野市をより住みやすい町にするために、市の状況に興味をもって生活していきたいと思った。このY生の姿から、「パフォーマンス課題」を導入した学習を展開することは、「社会的事象の意味や意義などを多面的・多角的に考察する力」を高めるために有効であることが明らかになった。

5. おわりに

本実践より、高齢者が運転免許を自主返納し、安心して生活していくことができるまちなにするために、市に提言するレポートを作成する活動、「私たちが目指す長野市の姿」に着目して各改善案のよい点や問題点を検討する活動を位置付けたことは、社会的事象の意味や意義などを多面的・多角的に考察する力を高めるために有効であった。

生徒の問いを基に、単元のはじめに「パフォーマンス課題」とルーブリックを提示することで、生徒は見通しを持って学習を進めることができた。一方で、長野市に提言する活動は教師から提案したものであり、生徒の願いには必ずしも沿ったものではなかった。今後は、『新要領』で重視する見方・考え方について、生徒の願いに沿いながら、生徒がより豊かに働かせていくための「パフォーマンス課題」の在り方について究明していきたい。

文献

- 宮田佳緒里, 奥村好美, 2017, 学習課題と評価課題の機能を併せ持つパフォーマンス課題を組み込んだ単元設計とその効果—中学校社会科「日本の諸地域」の学習を題材として—, 兵庫教育大学 研究紀要, 51, pp.109-117
- 文部科学省, 2008, 中学校学習指導要領解説 社会編
- 文部科学省, 2018, 中学校学習指導要領解説 社会編
- 西岡加名恵, 石井英真, 田中耕治編, 2017, 新しい教育評価入門—人を育てる評価のために, 有斐閣, 東京
- 西岡加名恵, 石井英真編, 2019, 教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価—「見方・考え方」をどう育てるか—, 日本標準, 東京
- 豊嶋啓司, 柴田康弘, 2018, 社会科パフォーマンス課題における真正性の類型化と段階性の実践的検証, 社会科教育研究, pp.14-26

(2020年9月25日 受付)